

# 「わたしの人生」 まだまだこれから —— 四股で乗り切ってきた人生 ——

福澤盛吉 (中45回)

気がついたら、私の周りには同級生の姿はなく、若い方ばかりになって、現代版浦島太郎の気分です。しかし、まだまだやることはありますので、後ろを向いてはおられません。

## 笑顔のない卒業式

忘れもしない、昭和20年2月28日<sup>(※1)</sup>、卒業式の日。学校も見納めだと数人の同級生と屋上に上がって風越山に一礼し、赤石山脈の方向に目を転ずると、見たこともない飛行機が飛んでいます。「あれは日本の飛行機じゃない、畜生！ 敵機B29だ」。この頃からB29は自分の家の庭の上であるかのように、悠然と伊那谷の空を飛んでいた



180度開脚の取材を受ける。2018年7月8日付「北陸中日新聞」



●ふくざわ・もりきち  
昭和3年、飯田市知久町生まれ。夜間大学に通いながら、国家地方警察（現・警察庁）に勤務。後に広告会社をおこし、持ち前のアイデアで時代を先取りして活躍。数度の大病を克服し、健康の大切さを広めたいと願っている。

のです。

戦争がいよいよ激しくなっていたため、我々45回生は1年早く練り上げとなり、44回生と一緒に卒業式をすることになりました。その年も授業があったのは1学期だけで、6月からは伊那町の飛行場の建設工事に行っていました。勉強どころではなく、汗と涙の軍事教練と飢餓の学徒動員に追われた、長く苦しい4年間でした。

講堂には、前列に先輩達、1列おいて私達、162名ほど。まるで追悼式のような静けさでした。なぜなら、前年12月7日の東南海地震で、名古屋の軍需工場に動員されていた中44回の先輩が7名亡くなっていたからです。その中には親しい先輩もいて、大変辛かったです。

## 父親代わりの兄達の思いを胸に進学

父は日露戦争をはさんで6年間も軍務に服した後、帰後、特攻隊に編入。10か月間も便りがなかったので戦死したのと思っていたところ、敗戦後、ひょっこり帰ってきて皆を驚かせました。

私が飯田中学に入るに当たっては、親族会議が開かれました。親戚には中学に進学した者はいないうえに母子家庭でしたから、叔父叔母たちからは反対されたのです。しかし、兄の遺言と残してくれた貯金があり、担任の推薦もあって、母の「一銭たりとも親戚には頼らない。いざとなれば自分で食い扶持は稼がせる」のひと言で進学できることになったのです。

飯田中学に合格すると、名前を書いた立派な表札をいただきました。玄関にかけるとピカピカ光って、近所の人たちもわざわざ見に来て喜んでくれるほどで、とても誇らしかった。教頭先生の堅苦しくない挨拶に、なんて自由なんだと感動し、上級生たちとの兄弟のような交わりにも感激しました。まさか、前述のような卒業式を迎えることになるなど、誰も考えなかったでしょう。

## 上京して仕事に勉学に励んだ二十代

辛い卒業式の後、校舎を豊川海軍工廠学校工場にするための改修作業に取り組んでいたところ、校長から海軍特別幹部候補生に応募するように言われました。母を残

郷して知久町で商売を始め、成功しました。大きな家で、職人たちも一緒に賑やかな団らんがありました。学校から帰ると、友達と相撲を取ったり、愛宕神社の坂を下ったり上ったり、日が沈むまで遊びました。家の横には、商売の下駄の材料である桐の太木が山積みで、木にのこざりを入れると出てくる白い虫を焼いて辛子醬油で食べさせてもらうと、それはおいしかった。そんなことを今でも覚えています。父はしかし、関東大震災、大恐慌、長男の死と不幸が続き、過労がたたって昭和11年、私が小学2年生の時に57歳で亡くなりました。

兄は5人いました。長兄は満州事変時、軍事訓練中に倒れ、病気になるって帰郷、療養虚しく亡くなりました。次兄は、独学でガリレオ式天体望遠鏡を作るほど天文学が好きでした。長兄の死後、教師をやめて稼業を継ぎましたが、昭和12年、日中戦争に召集され、翌年、徐州大戦で戦死しました。21歳でした。三兄は親戚に養子に行きました。四兄は絵がうまく、日本画家の川合玉堂の弟子になり「玉翠」という雅号をもらっていました。が、海軍に召集され、岩手県山田港から横須賀に向かう途中で、乗っていた掃海艇がアメリカ軍の魚雷により撃沈されて死亡しました。昭和20年4月、23才の時です。飛行機乗りで憧れていた五兄は徳島航空隊で訓練を受けた

7 (※2) その当時、飯田中学校合格者には、一人ひとりの名前が書かれた木の門札が配られた。(83ページ参照)

(※1) 公式には3月28日となっているが、実際には2月28日に卒業証書を授与された。

して行きたくなかったのですが、合格したため、4月から横須賀武山の幹部学校に行きました。毎日、勉強、試験、訓練でヘトヘトになり、夜は空襲に遭うといった、生死紙一重の体験もしました。8月15日の玉音放送は、雑音が多くてよく聞き取れませんでした。

終戦後は、一家の大黒柱となるべく、日通に就職しました。赤穂（現・駒ヶ根）支店には荒木清行さんという営業部長によくしてもらいましたが、なんと飯田中学の出身（中23回）で「勝利の曲」を作詞した先輩でした。

日通で一生懸命働いて安定した収入も得られました。あるご縁で上京して国家地方警察（現・警察庁）に勤めることになりました。国家予算を担当する部署に移ってからは、とにかく忙しかった。官舎での暮らしでしたが、安月給の中から母への仕送り、大学の学費の支払いに生活費を捻出し、友人との付き合いも一切せず、爪に火を灯すような、涙がこぼれるほどのつましい生活を送りました。皇宮警察の予算を担当した時は、慰労のため乗馬をさせてもらったことがあります。今の上皇の姿を馬場で見たこともいい思い出です。馬好きだった長兄に、田舎で馬に乗せてもらった記憶が蘇りました。大蔵省（当時）主税局にお父様が飯田出身の方がいて、家に招かれたこともあります。その頃に培った人間関係が、

タクシーに広告をつけました。この宣伝は、すごい影響力を発揮しました。

### 同級生の輪を広げて、皆で健康になろう

さて、休日も返上して走り続けていた私でしたが、47歳の時に、膠原病（皮膚筋炎）に侵されて、再起不能と告げられました。難病指定です。いつときは声も出さず、ボールペンも握れないほどでしたが、幸い、対症療法で投与したステロイドが効果を上げて立ち直ることができました。

その3年後、再びピンチが訪れます。葉のせいでの免疫力が失われ、敗血症にかかってしまったのです。40度という急激な高熱によるショック状態で緊急入院し、家族は「あと3日の命」と宣告されました。開発されたばかりの新薬のおかげで、三途の川を渡る一歩手前から生還できたのは、本当にありがたかった。父が、兄達を守ってくれたのでしょうか。

78歳になった私を次に襲ったのは、脊柱管狭窄症でした。伝い歩きしかできなくなり、痛みを抱えて数々の病院を回りましたが、どこの病院で診てもらっても、年齢的なこともあり、手術は不可。ようやく1年半後に名医との出会いがあり、3回の手術を受けて復活しました。

後年、大いに役に立ちました。

その後秘書課に移り、2人の警察庁長官に仕えました。長官と公用車に同乗する機会が多かった当時、時代は高度成長期です。高速道路がどんどんできて、自動車は増え、渋滞も起こる。前方のタクシーを眺めながら、あの後部ガラスに広告を貼ればいい宣伝になる、と考えたアイデアが、後の自分の起業につながっていったのでした。

### アイデアを生かして広告会社を設立

35歳で警察庁をやめて、起業の準備を始めました。その頃は、東京都の屋外広告条例で、都市の美観を損ねるため、タクシーの外面には自社の広告以外はつけてはいけないという決まりがあったのですが、私は元役人だった経験を生かし、知恵を巡らせて、これをクリアさせました。35歳から始めて3年かかりました。

それからは、日本中のタクシーにうちの広告をつけてやろう、と走り回り、広告業界最大手の電通の全体会議で広告商品として決定したのです。最初に、当時、繊維産業から化粧品事業に進出しようとしていた鐘淵紡績（現・カネボウ化粧品）が10年契約を結んでくれました。まず東京に3000台、すぐに6000台になり、北海道から仙台、名古屋、大阪、四国、九州と2万台近くの

その後、リハビリの一環として、四股トレーニングを始めました。というのも、小学4年から相撲体操が教科としてあったので、私は相撲が大好きでした。校庭に作られた土俵で、3人抜き、5人抜きをしたものです。進学できなければ相撲取りになって、家計を助けようと思ったほどでした。思えば、小・中学時代から辛くて泣きたい時にはいつも四股を踏んで気持ちを支え、盛り立ててきたのです。この四股トレーニングのおかげで、2017年には『転ばぬ先のシコ』の表紙モデルも務めました。

現在ほかに、ノルディックウォー

キング、ポールウォーキングやヨガ、バレエストレッチ等もしています。この動画もご覧ください。こうした健康づくりを通して、世代を超えて、同窓生



『転ばぬ先のシコ』（ベースボールマガジン社刊）

の皆さんと交流を深めていきたい、それが今の私の夢です。まだまだこれからです。一緒に健康づくりをしていきましょう！

（インタビュー・まとめ／下平紀代子）